

平成28年度第1回蘭越町総合教育会議会議録

日 時 平成29年1月19日(木)
午後1時30分～午後3時45分

場 所 蘭越町役場3階会議室

出席者 構成員 町長 金 秀行
教育委員会委員長 鍋田 囿雄
教育委員会委員長職務代理者 西澤 雅明
教育委員会委員 池田 志津子
教育委員会委員 及川 かをり
教育委員会教育長 首藤 一幸
説明員 教育次長 小林 勝司
学務課主幹 今野 満
生涯学習課主幹 熊谷 信宏
スポーツ課主幹 山本 清隆
花一会館長 槌谷 文芳
傍聴人 なし

午後1時30分開会

1 開 会

小林教育次長)

町長、教育委員、皆さんお揃いですので、ただ今から平成28年度第1回「蘭越町総合教育会議」を始めさせていただきます。

2 町長挨拶

小林教育次長)

初めに金町長から御挨拶をお願いいたします。

金町長)

教育委員の皆様方には、お忙しいところ教育総合会議に御出席いただきまして、ありがとうございます。

日頃から町行政のさまざまな推進、教育行政の推進に対しまして、それぞれの立場で深い御理解と御協力をいただいておりますことに対しまして、心から感謝申し上げる次第でございます。

私も昨年11月13日から第4代目の蘭越町長に就任させていただきました。町政の舵取り役という重要な重責、重みを私自身感じております。職員共々、町民の方々が

住んで良かったと思えるようなまちづくりを進めていかなければならないと心新たに気を引き締めて、今、業務を行っているところです。

本日の総合教育会議ですが、地方教育行政の組織及び運営に関する法律に基づき行う会議でございますが、私が11月から就任して初めての会議になります。

今、日本全体、特に地方自治体において、経済の低迷、過疎、人口減少問題が課題となっております。この人口減少社会に対応するための一つの方法としては、「子どもをしっかりと育むことが未来に繋がる」ということで、今まで以上に、しっかりと子どもを育む、そして、その仕組みをつくるということが重要になってくるのではないかと考えております。

そのためにも、本会議で活発な御意見を出していただきまして、私としても教育委員会との連携をより一層強くして行きたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。話し合いについては、できる限り形式的に捉われず、ざっくばらんに、いろんな自由なお話しをできる会議として、私も皆さんのお話しを伺いますし、私の思いもお話しできるのではないかなと考えております。教育だけではなく、広い意味で、まちづくりも含めて御意見等いただければと考えております。よろしくお願い申し上げます。

3 教育委員長挨拶

小林教育次長)

続きまして、鍋田教育委員長から御挨拶をお願いいたします。

鍋田委員長)

それでは一言御挨拶を申し上げます。

およそ一年半ほど経ちました。諸般の事情もございりますが、平成28年度の総合教育会議が開催できますことを嬉しく思います。御準備いただいた事務局の方、日程調整その他で御苦勞をお掛けしました。そして、新しく町長になられた金町長、御就任おめでとうございませう。

我々、長い者は12年、そして8年、宮谷内前町長の教育行政に慣れ過ぎてしまって、実は今、反省しているところでございませう。新しいお考えを私たちに御教授いただきまして、また、気持ち新たに教育行政に携わろう、そういう決意でございませう。今後とも御指導のほどよろしくお願い申し上げます。

本日の総合教育会議、かなり新しいものが議事として挙がってまいりました。事前にお配りした資料を御覧になって、蘭越町もいよいよこういうことに取り組まなければならないのかなと、そういう時代になったんだなと、ひしひしと感じたのは自分だけではないと思います。それだけに、逆に言うと、思ったことを言えるのかなと、どの町村もまだ完全にやりきっていない議題がございませうので、蘭越の独自色を出せるような、そういう会議であってほしいと思いますし、私もこの場は一委員でございませうので、忌憚のない意見を出して、少しでも蘭越町のためになるような方向で進めていきたいと考えておりますので、今、町長が仰るとおり、思っていることを、また、こんなふうにしたらもっと良くなるのではないかなということ、どんどん出していただき、闊達な場に

ていただきますようお願い申し上げます。簡単ですけど挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

小林教育次長)

続きまして、今日の調整事項に入るわけですが、総合教育会議は、一昨年(平成26年)の8月31日に、平成27年度第1回会議を開催して、実質的には2回目ということになります。金町長が就任して初めての会議となりますので、改めて、前段に総合教育会議というものについてと昨年度開催した会議の経過、概要について、若干の説明をさせていただきます。

資料1、4ページ「総合教育会議について」を御覧いただきたいと思います。

地方教育行政の組織及び運営に関する法律が改正されまして、平成27年4月1日から施行されております。この法律の第1条の4第1項において、総合教育会議の設置が規定されたところであります。その目的としましては、教育に関する予算の編成や執行、条例提案など、重要な権限を有している地方公共団体の長と、教育委員会が十分な意思疎通を図り、地域の教育の課題やあるべき姿を共有して、一層民意を反映した教育行政の推進を図るということにされたものです。

「2. 概要」ですが、下段のところ(2)です。「総合教育会議の設置」の部分を御覧いただきたいと思います。

総合教育会議は原則として、地方公共団体の長が招集することになります。必要に応じて教育委員会が総合教育会議の招集を求めることも可能とされているところです。構成員は首長と教育委員会で、必要に応じて関係者又は学識経験を有する者から、この会議で意見を聞くことができるということにとされております。

この会議で行う協議・調整事項についてですが、総合教育会議は、地方公共団体の長と教育委員会という対等な執行機関同士の協議、調整の場ということであり、合意した方針のもとに、それぞれが所管する事務を執行することとなります。法における「調整」ということですが、教育委員会の権限に属する事務について、地方公共団体の長の権限に属する事務との調和を図るということを意味しまして、「協議」とは、調整を要しない場合も含めて、自由な意見交換として幅広く行われるものと、この法律の中ではされているところです。

総合教育会議において調整が行われた場合は、双方が合意した事項について、お互いにその結果を尊重しなければならないとなっておりますが、調整のついていない事項については、それぞれが判断して行うということに法律上はなっております。

具体的な協議・調整事項3点記載しておりますが、①、②、③と記載しておりますが、1つ目は教育行政の大綱の策定、2つ目は教育の条件整備など重点的に講ずべき施策、3つ目は児童・生徒の生命・身体の保護等緊急の場合に講ずべき措置、このことについて協議・調整を行うということにされているところであります。

また、総合教育会議は、住民への説明責任を果たすということもありまして、会議は原則公開として、議事録も作成し、公開することとされているところです。

前回のこの総合教育会議におきましては、まず、資料の5ページに添付させていただいておりますが、蘭越町総合教育会議運営要綱について協議をいただきまして、それに

基づいて会議を進行し、蘭越町教育大綱、蘭越町いじめ防止基本方針についての調整をいただいたところであります。

また、蘭越町総合教育会議の開催は、児童・生徒の保護等緊急の事態の発生又は発生が予測された場合は随時として、通常は年1回、特に必要があれば2回程度の開催とする調整をいただいたところです。

以上、総合教育会議の概要について、簡単に御説明させていただきました。今までのところで何か御質問、御意見等があればお受けさせていただきたいと思っております。いかがでしょうか。

委員一同)
異議なし。

小林教育次長)

なければ、早速、蘭越町総合教育会議運営要綱に基づいて、会議を進めさせていただきます。

4の協議・調整事項からになりますけれども、要綱第3条により会議の進行は町長にお願いすることとなっておりますので、金町長よろしくお願いいたします。

4 協議・調整事項

(1) 教育委員会の当面する主な課題について

金町長)

それでは、要綱に定めているということもありますので、私が議長を務めさせていただきますと思います。よろしくお願いいたします。

早速、会議次第のレジメに沿って4の協議・調整事項の(1)教育委員会の当面する主な課題について、協議・調整をさせていただきたいと思っております。最初に事務局から説明をお願いします。

小林教育次長)

それでは、1ページ目をお願いいたします。教育委員会の当面する課題として、7点について挙げさせていただきましたところですが、

- 1つ目は、小中一貫教育も視野に入れた小中連携の取組
 - 2つ目は、コミュニティスクールの導入
 - 3つ目は、児童数の減少に伴う小学生夏季・冬季体育大会等のあり方
 - 4つ目は、生涯学習サークルの参加人数、蘭寿大学の入学者の減少
 - 5つ目は、曲子光男記念館の整備
 - 6つ目は、花一会の公立図書館化
 - 7つ目は、蘭越高校の存続に向けた対応
- というところで、挙げさせていただきました。

1点目の小中一貫教育も視野に入れた小中連携の取組についてですが、学校教育法の

改正によりまして、平成28年度、本年度から小中一貫教育を実施する9年制の義務教育学校が制度化されました。これは、市町村教育委員会などの判断で、既存の小中学校などを義務教育学校にできるということになっております。

小学校・中学校が独立した中でお互いに連絡等を取りながら、児童生徒の交流機会を設けたり、小中で連続した指導等を行うことが小中連携ということですが、一方、義務教育である9年間を小学校6年間、中学校3年間で区分することなく、連続した期間として捉えて、子どもの発達や学習の連続性を踏まえながら、9年間の一貫した教育を行うのが小中一貫教育ということになります。これは、既存の校舎、既存の小学校・中学校施設を活用して行う場合、校舎が一つでない施設分離型も可能で、こうなった場合であっても、一つの学校、一人の校長ということになります。

子どもの躓きの大きな原因であります小・中のギャップ、通常言われている「中1ギャップ」の解消や就学途中で教科の躓きによる子どもの困り感、この緩和が図られるということもあります。9年間一貫した教育方針の下で育むことができる等のメリットがありまして、全国で、その設置が増えてくるという予想もされています。本町は、2つの小学校と1つの中学校ですので、各学校間での合同行事の開催や出前授業、より細やかな小中学校間の引継ぎなど、さまざまな小中連携に取り組みながら、将来的には小中一貫教育を視野に入れた調査研究を進めていかなければならないと考えております。

2点目のコミュニティスクールの導入についてですが、コミュニティスクールは平成16年に制度化されたもので、正式名称は学校運営協議会という名称になります。現在は任意設置であります。平成27年12月の中教審の答申において努力義務という方針が打ち出されておりました。今後、全ての公立学校での導入が進められてくるものと思われまます。コミュニティスクールのメリットなんですけれども、校長や特定の教員が異動しても学校運営協議会によって地域との組織的な連携や協働体制が継続できる、子どもたちがどのような課題を抱えているのか、地域でどのような子どもを育てていくのかという目標やビジョンを共有できる、それから、学校や地域、子どもたちの抱えている課題に対して、関係者が皆、当事者意識を持って、役割分担を持って連携協働による取組ができるということが、メリットとして挙げられているところです。

また、町の人口減少と地域コミュニティの衰退は喫緊の課題でありまして、学校が改めて地域の核になるということで、地域コミュニティの再構築や活性化に繋がるのではないかと考えております。仮に、1つ目で言いました小中一貫教育を進めるとすれば、保護者や地域の理解が大前提になります。保護者や地域町民と子どもたちの義務教育9年間について話し合う場として、学校運営協議会を設置することが必要になってくるのではないかと考えます。いづれにしましても、コミュニティスクールの取組は、小中一環教育をする、しないに関わらず、避けて通れない課題になると考えております。

3点目、児童数の減少に伴う小学生夏季・冬季体育大会等の在り方についてですが、本町の小学校は2校で、児童数は全体で170名から180名で推移していきます。夏季体育大会の昨年の参加者は99名、冬季スキー大会は65名、また、夏季・冬季大会とは別に水泳連盟が主催している水泳大会の昨年の参加者は20名に満たないとい

う状況でありました。このような状況で、夏季・冬季体育大会を開催する必要性も含めて、根本的な部分から在り方について検討していかなければならない時期に来ているのではないかと考えております。

4点目の生涯学習サークルの参加人数、それから、蘭寿大学の入学者の減少についてですけれども、生涯学習サークル、例えば竹細工や陶芸など後継となる新会員が入ってこない、サークル自体の高齢化が進んでいて、技術の伝承も危うい状況になってきている現状にあります。また、蘭寿大学は高齢者が増えてきているんですけれども、新入学者が減少してきている現状にあります。時代背景からいって「みんなが一緒」から「それぞれ一人一人」の時代になってきており、価値観の多様化、何かに帰属して仲間と活動することに魅力を感じなくなっている社会状況というものもあります。そろそろ一度整理をして、体制を作り直す時期に来ているのではないかと考えております。

5点目の曲子光男記念館の整備についてですけれども、これは町民への丁寧な説明、理解を得ながらという取り組みがまず第一ということになります。現時点で何も具体的なものは無いのですが、小規模の保管展示施設を整備するとしても相当な費用を要するものでありますから、記念館を核として、絵画の展示、保管だけでなく、何か有効的に、発展的に活用、利用できるような可能性も探りながら、進めていかなければならないのではないかと考えております。

6点目の花一会の公立図書館化についてですけれども、来年度、閉架書庫の整備を行っていきます。それから、蔵書管理システムにインターネットでの蔵書公開機能を付加し、再整備して、平成30年度には公立図書館化を進めたいと考えております。それに当たりまして、将来的にどういう図書館としていくか、最終的な規模、人的配置も踏まえた町としての方針、これを固めておく必要があるのではないかと、教育委員会としても固めておく必要があるのではないかと考えております。

最後に7点目の蘭越高校の存続に向けた対応についてですけれども、入学者の減少は、蘭越中学校卒業生の絶対数が減少していることと、進路の多様化にあります。入学者への経済的支援、高校存続のために町民の理解を得られる支援は全て行っているというのが偽らざる現状だと思っております。地域キャンパス校の存続の基準を20人未満から10人未満にするように、地域キャンパス校所在市町村で要請活動を行っておりますが、根本的には蘭越高校自体が中学生に魅力を感じてもらえるような学校になることが第一でありまして、そのような教育活動をどうするかということが一番重要になってくるのではないかと思います。いずれにしても、蘭越高校の存続、この問題は教育委員会としても大きな課題であると考えております。

以上、ちょっと長くなりましたが、教育委員会の抱える当面の課題ということで、7点ほど説明させていただきました。

金町長)

はい、ありがとうございました。

今、事務局から教育委員会の当面する課題7点について、説明をいただきました。当面する課題はこれだけではなく、もっとあるかもしれませんが、今、主だったものとして、7点課題があるとの説明でございます。一つ一つ聞いていくと非常に重要な部分があると、それによっては早急に対応を取らなければならないものとか、中・長期的にとりか、考えて進めていかなければならないものとも私を感じております。その中で委員の皆さんから、一つ一つというよりも全体から見て、御意見、御質問等、フリーな意見の交換ということですので、忌憚のないお話しをしていただければと思います。

鍋田委員長)

かつては小1校・中1校の中で取り組まれていたものが初期の段階で、非常にやりやすかったと思うんですけど、小学校2校・中学校1校又は小学校3校・中学校1校、枝が2つ、3つある中で、小中一貫も十分可能だということが、自分が経営者のときも話しはありましたし、実際に例はありました。自分がいた頃、10年も前の話しですが、成功している例とちょっと停滞しているというのとで、これはいい策だという考えにはまだ至っていなかったような記憶があります。ですが、流れからすると、6年・3年というサイクルから、9年というサイクルに絞ってことを考えるということは、発達段階の連続性から考えると、大変必要なことなんだろうと、これが新しい日本の教育の在り方の根幹になるのかなと薄々とは感じていました。特に事務局で指摘された「中1ギャップ」、これが大きな壁で、中学校に行きたくない、中学校に行ったら急に子どもが変わっちゃった、学校に行かなくなった、こういうことが各地で聞こえてきて、「中1ギャップ」ということばが自然発生的に生まれてきたんですけども、これを解消する意味でもこの小中一貫というのは、蘭越でも十分考えなければならない問題だとは思いますが、おそらく今の現職の校長先生方は、十分に分かっていると思いますし、場合によっては研究視察でそういう学校に出向いて、実際に担当の方からお話しを聞いたりして学習されていると思いますが、教育長の方にその辺、校長会などでこのことについて話題になったこととか、どうなのでしょう。

首藤教育長)

小中一貫教育について、必要性についての話題というのについては、改めてはしていません。今、鍋田委員長が言われたように、道内の義務教育学校というのは平成28年度から認められているんですけど、道内では今2校、斜里町の知床ウトロ学校というのと中標津町の計音別学園です。どうして話題にならないかということ、9年間一貫してみるという部分については、実はメリットもたくさんあります。「中1ギャップ」、中学校に行ったときのギャップで不登校が解消されるとか、9年間独自のプログラム、教育課程が組めるというメリットもありますが、実は同じくらいデメリットもいわれておまして、例えば「中1ギャップ」の解消はされるんだけど、逆に、今までは小学校6年生になると小学校6年生という自覚があってリーダー性があったのに、中学3年生までいってしまうとそのリーダー性をどう養うのかという部分が、課題になっています。そ

れから、9年間、人間関係が変わらないので、児童生徒の人間関係が固定化される、教職員の負担感・多忙感が多くなる、それと独自の教育課程が組めるので、9年間、進み具合とかで自由に組めるので、転出していった子、転入してきた子がその流れに入れないので、例えば5年生で来たけれども、既に6年生をやっているとか、まだ4年生だとかということで、転出入者へのフォローをどうするのかというデメリットがあります。さらに既存の建物の中でできるといわれているんですけど、やるとすれば膨大な初期投資がかかるなどのデメリットも大きいものですから、なかなか踏み出せないというか、慎重になっている部分もあって、でも後々進んでいこうから、研究していかなければならないだろうとは考えてはおります。

金町長)

今、小中一貫という中でのお話が出ていて、全体通してと言いましたが、折角この部分でのお話が出ているので、皆さんからこれに関して御意見等があればと思います。

池田委員)

私も今回、この資料を読ませていただいて、平成28年度から義務教育学校というのが制度化されるんだということで、私なりに勉強しなければいけないと思って、調べてみたんですけど、小中一貫教育となると具体的に学校統合みたいなイメージが自分の中にあり、そうなったときに昆布小学校と蘭越小学校と蘭中がどういう形で、イメージしたんですけど、調べてみると施設の一体型という小中一貫もあるし、施設を分離した形での一貫教育もあると、その区別が難しいなど、あと小中一貫教育を進めるにしても、進めないにしても、小中連携というのは今年からでも進めていかなければならないことというのは、全体の流れからしてすごく感じるんですけど、小中の連携を考えるとすぐに小学生になるであろう幼稚園・保育所の父母といいますか、その人たちの意見も反映されるような、次のコミュニティスクールに関わってくるのかもしれないんですけども、そういう人たちの意見をどこかに、そういう人たちも一緒になって考えられるような仕組みというのを考えていった方がいいのかなと思いました。「中1ギャップ」ってなんだろうということで、私も考えてみたんですけども、いろんなことに書いてあるように、小学校のときはテストといっても100点取れるような問題を中心にして先生方が出していた。だから100点だったり、90点だったり、そういうのをたくさん取っていた子が中学校に行ったら、人間関係も変わり、時間も変わり、その上すごく重要な定期テストがきたときに、今まで100点とか90点を取っていた子が、60点とか70点を取ってショックを受けて、自分は勉強ができないっていうような自己否定というか、思ってしまったたり、また、クラブ活動で部活に入って、疲れてしまって、なかなか復習とか、そういうところに時間も体力も持っていけないという中で、それが積もっていったときに「中1ギャップ」に繋がり、それが不登校になり、それがいじめにもなりというようなケースが多いっていうのをデータで見たときに、そこのところを改善していく取組みっていうのをなんとか小学校6年生の段階で、小中一貫に行く前の段階でも工夫して、テストを難しくしろとは言いませんけども、何か工夫をしてギャップを埋

める仕組みはないのかなと、そのためには、小学校・中学校の連携、また、場合によっては幼・小の一貫したその辺の取組みの中で、一貫教育をどのように考えていくのかということをお話し合っていくことが大事だと思います。道内では少ないようですが、2014年のデータを見ると一番小中一貫で多いのが、小学校が2で、中学校が1というところが一番多い。4割がそういう形だということを聞いて、蘭越と大体同じパターン、小2の中1。やり方もいろいろだけど、1年生から4年生、5年生から中1、最後の中2から中3という、4、3、2が多いというのを考えたときに、具体的にイメージしながら、漠然としたメリットとデメリットだけを、段々不安になってくるのって、どこをどう絞って考えていいかわからないので、実際に連携をやっているところの生の問題点とか、良かったところを聞いてみたいというのが、私自身の思いです。

首藤教育長)

鍋田委員長の先程の小中一貫の話は、校長会でも出ていないかとの話しだったんですけど、出ていないのではなくて、出ているんですけども、実は小中一貫教育よりも今言ったように、小・中・高、幼も入れて連携が大事ではないかということでは、ここ2、3年進んでいまして、いきなり小中一貫といっても難しいけども、小・中・高の連携が大事だということで、そういう取組みは各校長先生も含めて共通の認識であります。そのために教頭会と教務主任で教育課程研究会を開いたり、お互いに今は学校参観日は、高校の先生も小学校に来ますし、授業参観をしたり、高校の理科では小学校の交流授業をしたり、小中一貫も検討しながら、当面は小中を連携して、共通の情報を基にということを進めております。

金町長)

いかがですか。

及川委員)

小中一貫、コミュニティスクールに関しては、蘭越町教育委員会も含めて、最終的にどういう方向性に持っていくかという共通の意識調整が必要なことだと思っています。早急というわけには簡単にはいきませんので、蘭越町全体がどっちの方向に進んでいくのが良かろうという話し合いを積み重ねることが大事かと思います。その中で先程から「中1ギャップ」の話が出ましたが、社会的にはギャップは無くせということをニュースなどでよく聞きますけども、私個人としては、ここでギャップをなくしたら、中1のギャップはどこで発生するのだろうと思います。なので、ギャップをなくすのではなくて、乗り越える力を付けてあげなければ、子どもはいつかどこかでまたギャップを踏みます。少人数の小学校、中学校というのは、蘭越町の5年先、10年先の人口ビジョンを見ても、小学生の入学人数を見ても、なかなか数値を回復するというのは難しい状況なので、少数人数の中で、今もそうですけど、保育所から高校まで原則変わらないという人間関係の固定化の中で、子どもたちが自分を変えるチャンスに恵まれないということに関しては、9年間一貫した教育という中で、子どもたちがいつ、どう変わって、どう自分を出す場面をつくってあげられるのかということをお周りの大人が見守って

あげなければ、9年一緒に学ばせれば大丈夫ということにはならないと思っています。それで順番として、まずは教育長が仰ったとおり幼稚園、保育所、小・中・高の連携ということ先生だけではなくて、保護者や児童生徒も自覚できるような形で、連携体制を取ってあげることが第一歩かなと思います。その後にくるのがコミュニティスクールで、それを地域で見守って育てた中で、その後での小中一貫と私は考えています。

金町長)

ありがとうございます。

なかなか難しいですね。小学校だったら、地域性とか、校風とか、それぞれあると思います。そこで育って中学校に行くというのもあるし、それを一貫してやるための教育長が言ったメリット、デメリット、これを一概には進んでいかないということもあると思うし。ただ、及川委員が言ったように一つ一つ子どものためにみんながやっているということ認識して、話し合いを持ちながら、みんなが共通して持っていく方法を地道に進めていかなければならないのかなと思います。

西澤委員長職務代理者)

ちょっと前に国の学校教育の中で、6・3・3制がいいのか、それを変えるべきなのかという議論がありました。ずっと繋がってくるのではないかと思うんですけど、実際の話、今の義務教育の6・3でいいのか、私が簡単に決めることでもないし、言うことでもないですけども、6・3・3がいいのか、小学校の例えば3年生、それ以降は中学校ではないんですけども、4、5、6、7、8、9、そういう一つの区切りの中で教育をした方がいいのかという議論がありました。日本以外で9年間の中で教育をやっている国もあります。そういう話しがある程度進んだ中で、蒸し返しになったりしないか、今、小中一貫ということで、6・3で走っていると思いますけど、それを変えてという話しがまた出てくるのかなということにはならないのかなという気もします。いづれにしても教育長が言ったように、小中連携を検討した場合に、どこまで進んでいるのかという問題もあると思いますけど、また、逆にいうと小学校6年間で完全にできなかったことを9年間が終わるまでに勉強で身に付けるという方法もあります。大変難しい問題で蘭越ができるか、できないかということもありますし、全国的に見ても少子高齢化で子どもたちの人数も少ないということから、こういう問題も出てきたのかなという気はします。昔のように、例えば、蘭越小学校で600人もいたり、蘭越中学校で300人もいたりというときには、こういう問題が出てくるのかなという感じはします。その辺がどうなのか、難しいですけど。

金町長)

今日ここでこういう方向に行くということはないので、事務局の方でも情勢とか、そういうものをまた私共に提供してもらったり、こういう機会の中で話し合い合をしながら、どういう部分から進めていったらいいのかも含めて、これは検討していかなければならないことではないかなと思います。

これに限らず、この7項目の中で何か、これでもまたいいですし、何か御意見等ござ

いましたら。

西澤委員長職務代理者)

曲子さんのことについて、皆さん御存知のように8歳まで蘭越に居た曲子さんの絵を寄附していただいたということで、蘭越も嬉しいんですけど、保管ということで非常に苦労されているということで、美術品を保管する場合においては、室内温度が15度で、85%の湿度がなければだめみたいな話を聞きました。建物自体もある程度密閉性のいいものでなければだめということも考えたり、どこに、どんなふうにして、別に建てるのか、どこかを増築するのか、いろんな問題もあると思うんですけど、折角いただいた蘭越にゆかりのある絵ですので、これは大事にしなければいけないと思います。もし、やるのであれば、生半可の物を建てたのでは、後で絶対後悔するんです。やるのであれば、ある程度のお金をかけて、きちっとしたものを造るということで、そうすると今度、道からの美術品だとか、岩内かどこかの美術品も交換しながら、できるんです。ということで、何年かかるか分かりませんが、今、山村センターの2階に空調を良くして保管しています。あれだって、いつまで年数おけるのかなと、湿度、温度大丈夫なのかなと心配はあります。すべてお金がかかるということで大変だと思いますけど、私は、やるのであれば生半可な物ではなくて、きちっとしたもので、らぶちゃんホールが一番人の出入りが多いところで、街にも近いし、街の茶屋にも近いということで、街の茶屋を建てるときにも、構想としては真ん中に道路を造って、人が行き来できるようにということで、あそこに建てたと思います。どんどん人口が減っていますから、もう増える可能性はないとは言わないですけど、この程度の人数ですといくとなると、ある程度の人をおかなければならないということで、大変難しいとは思いますが。

金町長)

この間、たまたま町政懇談会、今各地で開いていたときに、一つ、曲子さんのこういうのはどうですかという案を言った方がいました。それは、単独で建てるのはもう無理ということで、やっぱり複合施設なんです。花一会図書館、文化的な施設という部分で、花一会図書館を増設して、その中に多目的に、本の部分もあれば、絵画とか写真とか、いろんな町民のものを展示しましょう。そういうような方法もあるのではないですかというお話をされた。

今、西澤委員が言ったらぶちゃんホールのところ、実は室野商店さんの場所を町で買いました。それと室野さんとらぶちゃんホールの横に倉庫が建っていました。今、壊しましたが、室野さんの倉庫、らぶちゃんホールの横です。斉藤商店の裏、実は町で取得しています。

鍋田委員長)

確かにこれから、この曲子さんの話しは、また組織を作ってどうする、こうするってやるわけにはいかないのでしょうか。ある程度、結論めいた方法を今年中に出さないと、さあ検討委員会、また検討委員会というような考えで今、進んでいますけど。

首藤教育長)

庁内の検討委員会は作って、見に行ったり、展示したりしているんですけど、議会の一般質問で町長の答弁の中では、やはり町民の声は聞かなければならないので、関係する団体とか、一般公募も含めて、町民の皆さんで検討委員会を開いて、そういう声を聞きながら、慎重に進めていきたいということは言っています。

金町長)

私も、せっかくの思いで蘭越に住んでいた方が、住んでいたという形で、寄贈を受けたものを返すということにはならないと思っています。ただ、そのやり方ですね。庁内の検討委員会では一つの案とか、その辺のところはできているんです。こういうふうにした方が良いのではないかとか、まだ最終まとめはしていないけども。それをこうしますというわけにはいかないのです。役場内の考え方を案としながら、関係するところに集まってもらって、説明を加えながら進めていかなければならない。そういう場を踏んで整理できればいいという考え方のお話しをこの間議会でさせていただきました。

西澤委員長職務代理者)

町もこれからケアハウスを建てたり、いろんなことがありまして、物を建てたことによって管理する人、雇用というものは大事です。そういう部分である程度お金がかかるということを見ると、例えばらぶちゃんホールにいる職員がなるとか、いろんな考えがあると思いますけど。

金町長)

西澤委員も仰るとおり、私も思っていたのは、単独で建てて誰か管理人を置いて、これからの時代は難しい部分があると思います。さっきの一つの例で言った複合施設というか、管理を一元化しながら、整備できる方法が一つの案なんです。どこかに単独で、立派な、近隣町村にあるような美術館というのは、これから蘭越ではなかなか町民も理解はしてくれないと思います。

鍋田委員長)

ある程度のものは、前の町長からしてみたら、身の丈に合ったものは造るということ、町民の方は理解されているという前提で動かないと、ことは進まないですね。

金町長)

そうです。

鍋田委員長)

ですよ。どうする、どうするという時代は終わって、何かをすると、何かを造るんだと、そこから次に進むときにどういう手立てでいくんでしょう。先程、教育長が最終的には町民のことですけど、いろんな人がいますし。

首藤教育長)

町民の方に何人か集まっていたいただいた検討委員会で、ある程度町の考え方も言いながら、理解してもらえる範囲の内容になれば、そこでやるっていうことにもならないので、またそれを町政懇談会なり、こういう部分で、こういうふうにやっていきたいという説明をしていくことが必要かなと思っています。一気に決められないですけど。

鍋田委員長)

くれぐれもサッカー場建設のときの嫌な思い出もありますので、ことの二の舞は踏みたくないなと思っていますんですけど、みんなが納得するというのは無理な話して、どこかでやっぱり決めなければならない。いきましょうという結論は、29年度には出さなきゃならないでしょうね。

金町長)

本当にみんながいつていうのは、これはほとんど不可能だと思います。そのために私共は町民の意見も聞きますが、町民の代表である議会と話し合いを大事にしていかなければならないと思います。ただ、町と議会だけで一方的に決めていいのかということにはならないので、途中経過とか、こういう考え方があるとか、そういうものは町民にも知らせていかなければならない。最後の提案は私がするわけですから、そこで決めたものを議会が許してくれるか、どうかという形の段階でいくことになりますが、一方的な部分だけは避けなければならないと考えています。

首藤教育長)

25年度と27年度の町政懇談会では、曲子さんから絵を戴いて、それは後世に残すべき大事なもののなので、収蔵・展示をしたいと、身の丈に合ったものは造りたいということは言っています。賛否両論はあるんですけど、造るという前提で、どういう大きさと、どういう内容のものであるのが一番、妥当かというところを探りながら、進んでいくしかないと思います。

鍋田委員長)

根本的なことなんですけど、仮にこの記念館が建つために教育委員会でもいろんな話が出ているんですけども、これを教育委員会が今後も管理・運営の任をしなければならないものなのか、目名のサッカー場とここは違うのではないかと私は思っています。確かに美術品ですよ。美術品は教育委員会イコールなのか、サッカー場はイコールだというのは分かるんです。教育委員会の場にこの話が出てくるたびに、実は、頭の中によぎったのは、教育委員会で検討しなければならないことなんだろうか、役場の総務とか、管財だとかも含めた中でのことではないかなと、実は私、腑に落ちないでずっといたものですから、今お話しをしているんですけども。仮に町民センターに造ろうが、花一会に造ろうがとなったら、教育委員会が所管をしているんで、これは教育委員会になってしまうのかなと、では、山村センターをもし改装して、あっちに持っていったら、それも教育委員会なのかな。本当に美術品の展示というのは、教育委員会なのか、どう

なのか、そこを私お聞きしたいと思います。

金町長)

一つの例というか、各近隣町村で、その分からいくと美術館とか、そういうものは、教育委員会が関わっているものが多いような気はしています。教育・文化的な部分の中で委員長が言うように、完全な町の財産なんだと、財産を管理・保管するという部分が教育委員会なのか、そこを単純な形でいったらそうじゃないかもしれない。それを町民に見せながらとか、青少年、子どもから大人まで、文化的な、そういうものを進めるとか、そこは教育委員会も関わってくるのではないかなと。こういう小さい町で、この部分はここだ、この部分はこっちだとは、なかなかいかないものですから、教育委員会に全部預けてやってくれというわけではない。総務もその部分からいくと関わってくるし、ただ、今検討委員会の委員長は、教育長にお願いしている。それから、展示、去年やっていただいた。

鍋田委員長)

とりあえず教育委員会もそんなにたくさんスタッフもいるわけでもないし、いざ建設というふうになったときには、教育委員会の人たち大変だろうなど、これから目名のサッカー場の維持・管理も入ってきますし。

池田委員)

絵画なので、保存も大変なので、一刻も早くというのは分かるんですけど、現実、やはり多くの人たちは、そういうことにまでお金をかけるのという人が多いのも事実だと思います。やっぱりこの記念館を造るか、どうかというのは、じっくり時間をかけて、まだ造らないのって、いつやるのっていう声が出るくらい、もう少し町民の中に曲子さんを聞いたことはあるけど、だけではなくて、観たことはある、去年はやっているけども、実際に観た人数はそんなに多くはないということを考えたときに、曲子さんの絵は結構いいよとか、私好きだよとかいう人が、もう少し増やすってということも考えていかなければいけないと思います。実際に戴いた絵の中から、例えばですけど何点か写真か何かにとって、町民みんなが目に見えるカレンダーを、いろんな季節の絵があったので、家とか施設に飾れるカレンダーを作って、曲子さんの絵ってこういう絵なんだって思ったり、また、町の広報とかに毎月曲子コーナーみたいなのを設置して、曲子さんの目に訴える。こういう絵、ここは港だとか、少しずつでも積み重ねて町民に曲子さんの絵というのをもう少し浸透させるということをやっていくことが、もう既に着工したという前に必要なんじゃないかなということが1点と、例えば花一会と一緒にとか、先程いろんな声が出ていましたけど、小中一貫とも関わってくるとは思いますけど、万が一小中と一緒に、これから先10年後には小中一つ一緒にしようとかいう案が出たときには、例えばあるスペースに花一会の図書館機能や絵画を設置できるスペースを設置して展示するとか、1か所に固まって、特に小さい子どもたちとかが常に曲子さんの絵を観ながら、大人になってふるさとを思ったときに、曲子さんて蘭越の画家なんだよっていうことが、子どもたちが小さいときから目にしていけるような、そういう場面をすぐに

は小中が一つになるのは現実無理なんでしょうけど、今できることは例えばカレンダーだとか、今あるらぶちゃんホールとか、山村開発センターとか、可能なところに1枚でも多く飾って、美術品なので湿度とか温度とか大事だとは思いますが、どんなに立派な着物でもタンスの中に仕舞ってしまっただけでタンスの肥やしになるよりは、町に戴いたものであれば、多少の色が変わったなんだからっていても、今いる子どもたちが蘭越にいる間に、そのことが目にして分かるっていうことを今できることから、やりながら、もったいないから、記念館とかちゃんとしたものを作った方がいいんじゃないですかっていう声が、逆に町民から、やるって言ってたけどいつ造るのっていう声が出るぐらいになるまで、小さなことを積み重ねていくことをやり続けていくことから、始めた方がいいのではないかな。やっぱりサッカー場と美術館はぜんぜん違うんですけど、蘭越はすごいお金を使って大丈夫ってというような不安な声もあって、言っている人たちはみんな曲子さんの絵を知っている、観たことがありますかって聞いたら、観たことないっていう人も多いので、そういうことを大変ですけど、去年の展示も一つの大事なことだったと思います。また、子どもたちに中学校に入学するときに曲子さんの絵がついたクリアファイルとか、曲子さんの絵がついた何かとか、そういうものもプレゼントするとか、そういうこともやってみてはいいのではないかなと個人的に思っているんですけども。

金町長)

いかがですか。

これについては、今日どうしようというわけにはいかないのですが、こういうような意見を出してもらいながら、今後検討しながら進めていきたいと思っています。

あと全体的にこれだけじゃなく、今7点挙げましたその中で、何かお考えになっていることありますか。

小中の一貫という中で、先程教育長も言ったんだけど、高校の存続、そういう部分の中では小・中・高まで入れて、先生方が連携を取っていくと、非常に存続とか、そういう部分の中でも、大事なことがありますよっていうことを、ちょっとお話しがありました。

先程、委員の方々にも小・中・高だけではなく、幼稚園とか保育所も含めて、蘭越の教育っていうものをどういう形でもっていくのかということ、関係者が集まって話し合いをすることによって、共通した理解とか、いろんな課題とか、そういうものも見えてくるので、そういうような話し合いの場っていうのは必要じゃないのかなと感じました、私は。

西澤委員長職務代理者)

全体的に今お話しを伺ったけど、早急に決めるのではなくて、ある程度スパンを用意して、造るっていうことが大事だと思います。確かに何をやるにしてもお金がかかる、それに関わる人がいるっていうことで、大事なことですけど、やるだけやって後はもう行政で監視して、どんどん買いなさいよ、使いなさいよ、みたいなことでは、それではだめだと思います。なるべくかからないような方法でやっていかなければ。要するに人口が減るということは町税もなくなるし、交付税だって町長が前に言っただけ

ど町の借金の70%ももらえるって言ってましたけど、本当にそうなんですかって。今これだけ不況で金がないときに、きますか。70だけど、60にしてくれ、50にしてくれってなったときに、それが心配、何一番心配なんです。なるべく金をかけないで、使わないでいいものを造る。難しいですけど。それと東京辺り、札幌辺りの一極集中はだめだと思うんですけど、蘭越町は逆に一極集中させないとだめだと思います。もう地域、目名を排雪してきましたけど、まず誰も歩いていないです。ものを何か造るということは、外から誰か来ますから、一時的にはいいと思いますけど、それは本当に一時的なものであって、汽車から降りる人もいない、歩いている人は年寄ばかりだってなって、自然消滅みたいな恰好で、限界集落じゃないんだけど、蘭越町であちこちシャッター街になって、歯欠け状態でなくなってくると、やっぱり蘭越に集めないと。もう遅いくらいだと思うんだけど、これからいろんなものを建てるわけにもいかないんだけど、蘭越町の中心市街地そこに集中させて、そこに人を呼ぶっていう。

及川委員)

私も賛成です。コンパクトシティって考え方はいいと思います。支障がないと思うんです。2、30年前までに港は貝の館、名駒にはフィッシュ・アンド・名駒っていうのが建ちましたけど、もうそういう時代はちょっと終わったかなと。ゆとりをする価値はあるんですけど、それを育てていくとか、大きくしていくことが無駄じゃないだろうか。でも、コンパクトにするのであれば、やはり交通手段。蘭寿大学にしても、生涯学習サークルにしても、勝手に車で来て、勝手に帰ってちょうだいという形では、参加者はどんどん減る一方になると思います。サークルの時間帯に合わせて送迎、スクールバスか、らんらん号か、ワゴン車でもいいんですけど、足の確保をしてあげなければ、参加者はどんどん減るのではないかと思います。

鍋田委員長)

高校の存続には、町に昔は存続をするための会みたいなのがあって、今は名称が変わっていますけども、なんとか蘭越高校を残そうという会はあるんですが、具体的にそこでは何らしい方向性というのは生まれてこないですよ。本当に蘭越高校を残そうと思ったら、私の個人的な考え方ですけど、もう町立移管しかないだろうと、公立返上というんですか。近隣にはニセコや留寿都やら、真狩がありますけども、ここ最近では三笠あたりが移管をして、思い切った学科転換をして、それで町内・町外からもその学科に魅力を感じてくる子が随分増えたということで、何回もテレビに出てきましたけども、やっぱり普通科ということでもっていけば、おのずと同じ普通科だったらこっちに行くという子が出てくるだろうと。これはそういう進路指導をしているわけじゃないんだけど、そうなってしまうのが実際の中学校の進路指導ですから、ある程度のレベルがあったら、あなたはこういう学校を目指せば、目指せるよという形にもっていきますし、親もそこに対して、うちの子がそこまで力があるんだったら、その力を伸ばしてやりたいから、蘭越から離れてって考えていくのが常だと思いますから、そういう流れの中、でも蘭越を残したいというふうに強く思えば、やっぱり私は思い切って、どれだけお金がかかるか分かりませんが、町立移管ということも思い切って考えなければならな

いんじゃないかなと、私は思っていて、そのために近隣以外、どういう学科が受け入れられやすいのかというのをこれから考えればいろいろ出てくると思いますし、常に学科というのは時代が何を求めているかということに、敏感に反応しなきゃならないというところがありますから、成功もあれば失敗もあると思いますけど、このままずるずるいっちゃうと、やっぱり蘭越高校はいつかはなくなるよねっていう声になってしまうんじゃないかなっていう感じがして、町として何かこう思い切った策を講じないと、この蘭越高校の存続は、私厳しいんじゃないかなっていうふうに、例えば地域キャンパス校の基準が20から10になったにしても、ただ10になって1学年10人で、それが3学年30人で、普通科で、何か寂しいような感じがします。1学年10人に満たない学校がどーんとあっても、それが町にとって、それがいいことかどうなのか、何かむなし感じがしますけど。

金町長)

非常にやはり公立として存続させていくというのは、本当にいろんな部分の中で、これからもやっていくというのは間違いないです。

昨日も教育長と2人でキャンパス校の取組みも含めて、道議の先生とかに要請したりとか、お願いしたりとかいうことをやってきてはいるんですけど、公立ということで、ニセコなんか、真狩ですか、この辺だったら留寿都からいくと、福祉関係は今じり貧になってきている。少なくても、なかなかもう入る人もいないということで、話しをしていました。

首藤教育長)

ニセコの教育長も一昨年あたりから、がくっと入学者が減って、かなり大変な状況のようです。

西澤委員長職務代理者)

我々が受験のときは9万人くらい受験生がいたと思うんですけど、今4万何人くらいですから、おのずとそっちこっちに人がいなくなるので、当たり前ですよ。9万とはいかなくても、もう少し、せめて6万とか、もう少し増えてくれれば、学校を選択しても、蘭高に来てくれる人もいるだろうし、蘭中にもいるだろうし。

金町長)

私も思うんだけど、10人で1学級で、30人で、生徒が生き生きとして学校生活を送っていかれるのかというと、やはり、それなりの人数がいないと何もできない気がします。

何かあまり暗い話ばかりで、どうですかね。

次の議題もあるものですから、これに関して何かまた皆さんの方から、今日ここでこうだっということ、なかなかならない部分もあると思いますが、皆さんのお考えしていることがあれば、教えていただきたいと思います。

池田委員)

蘭越高校に関しては、私も今、自分の娘のこともあって言いづらい部分もあるんですけども、やはり子どもは自分の目指す進路に向かって、どこに進むかという子どもなりの思いもあると思うので、何とも言えないんですけど、今、蘭越にはALTが入ってくださっているし、これからは町長のお話しにもありましたけど、英語っていうのはものすごく大事になってくるかなと思いますので、制服とかも大事ですけど、蘭越高校に行ったら、ライアン先生に教えてもらえる授業があって、生きた英語が使えるようになるっていうような、英語にもう少し力を入れていくような形をもう少し取れないかなと思います。

鍋田委員長)

そういうのはやっぱり公立高校だと難しいんです。カリキュラムと体制でいくから、それに充実させたくても、できないんです。それが公立の不便さです。

1週間に何時間までということですから、それを倍にするっていうことをしてくれれば、非情に柔軟性があってやりやすいんですけど、それで学科変更しなくても、これであってというふうに持っていけるんですけど。

池田委員)

町として、例えば英語の時間にALTの人が応援に行くとかっていう体制を取るっていうのは。

鍋田委員長)

それはいけるんですけども、時間割がそこまでは組めないです。週3時間とかね。そこを充実するって、時間を増やしてやらないとならないですから、そこを高校の先生方、我々の領域に入ってきてもらっては困るというふうになると思う。

金町長)

英語っていう部分にこだわったら、要するに公立高校で俱知安に英語科っていうのができないかっていう部分も考えていったら、英語だけではだめらしいんです。グローバル科っていうのだったら。

首藤教育長)

それも今言ったように道議の先生の話しだから、道としてそういうことを考えていきたいという話で、それが道立高校なものだから、町がどこまで加入できるかという、教育課程を作るのは道なので、こういうことだということで、相談できるかもしれないけれど、限界があると思います。

金町長)

池田委員が言うように、これからの必要性というのは私も感じています。小さいうちからそういうものに慣れて、経験をさせて、自由に喋れるようになれば、すごくいいん

だろうなどは、私も感じます。身近でそういうことが、話せるようになればいいなと思います。

鍋田委員長)

やっぱりそういう考えを実現させたいと私も思います。今の話し、池田委員、これで2回目ですね。我々の前で言ったのは、だから痛いほど分かるし、確かに現実そうだし、それは正に蘭越高校がぴかっと光る一つのものになりうることは、十分分かるんだよね。だけどそれをやるには、壁が多い、障害が多いんです。

西澤委員長職務代理者)

私立高校だとそれは。

鍋田委員長)

十分できます。正に学科だとグローバル科、英文科ならだめなんでしょうね。大学なら英文科がメインだけれども、公立高校だとグローバル科、そういう名称じゃないとだめだと。

金町長)

それがどういうふうな名称になるか、分からないけれど。

鍋田委員長)

商業科とか、農業科とかはあるけれども、公立高校に英文科は作れないんですね。

金町長)

いかがですか。

次の課題もありますが、これだけ7項目、事務局の方から出ておりますけど。

鍋田委員長)

児童数の減少に伴う各種大会の衰退と言ったら少し失礼なんですけど、参加人数がどんどんどんどん減ってきて、今まで2時、3時までやっていた大会が、昼で終わるようなのが顕著に見えるんですけども、私は夏の大会も冬の大会も見てますし、水泳大会は行ってませんが、連盟主催のロードレースなども同じような扱いで見ると、減ってきているなという印象が否めないんです。ロードレースで親子レースはいっぱいで、ぶつかるのが心配くらい出ているんだけども、小学生・中学生になると極端に2人、3人しか出ない。以前は男子、女子で、昔は離れて出していたんだけど、今なら男子と一緒に出して、ゴールを分けるっていう感じで、それでも何も支障がないという状態ですし、小学生の陸上なんかにしたら、今までは自分は番編をやっていたんですけど、予選がいっぱいあったんですけども、今は予選やる組っていったら何組もない。一発決勝で、どこにいるかといったら、3人で決勝とか、4人で決勝とかいうので、予選が全くいらぬ種目、特に100mとか、5kmとか、タイムを拾ってきて。逆に言うと自分の時間

帯もそうなんですけど、だぶっちゃうんですよね。今まで予選があって、終わったいい子を決勝にまわすから、間が空くんですけども、間空けれないです。間を空けるっていったら完全にグラウンドを静かにしちゃって、今は休憩時間ですよっていうことにしないと、子どもたちが次々次々にやらなきゃならないですから。それくらい夏の陸上なんかは子どもたちの参加が非常に少ない。170、180人で推移していくなら、彼らの7割、8割が出てくれば、また盛り上がるんだけど、強制もできない。そこが主催する側としては、痛し痒しで。

金町長)

町教育委員会が主催しているこの分は、ある程度減少してくるんだったら、見直しとか、そういうことも今後検討していく必要があるんじゃないですか。毎年来たから、やりましょ、やりましょって感じで、一回こういう課題を出してもらって、現状と声を聞きながら、少し縮小した形でできるのか。その辺は今後、今委員長が言ったように、難しい部分はやめるならやめるとかで、変えていくことが必要じゃないでしょうか。

首藤教育長)

できるだけ出してもらうように、学校も含めて、やっぱり、努力はしないとならないんですよ。とにかくできるだけ出てくれ。とはいっても、生徒がどうしても、出たい人がいなくなっているのが現実で、毎年毎年参加者が少なくなっているのが現実で、前は町民陸上だったときは、他の競技とぶつかっても、そういう町民大会を優先してくれたんですけど、最近はサッカー、どうしてもサッカーの大会に行かなきゃならない。去年初めて野球の大会が、今までは野球は出してたんですけど、保護者が絶対に野球の大会に行かなきゃならないということで、人が少なくなっているにも関わらず、種目が多様化しちゃって分かれちゃう。今言ったように強制じゃないものですら、できるだけ出してもらうように協力を得ながらも、サッカーの人たちはサッカー優先だし、野球の人たちは野球優先で、ますます難しくなっています。

金町長)

一度先生とか、そういうのも含めて、努力はして、なるべく集めて実施をしてもらうように。でも今言うように、少年団とか優先的にそっちに行くって時代になってきているから。

首藤教育長)

そうなんです。それは止めれない。保護者に絶対にこの野球の大会は出してもらわないと言われて、先生たちも止めれないんです。

金町長)

ずっと伝統ある体育大会ってやってきたけども、その辺のところでは一回見直しを図るとか、それは必要なことかもしれない。

時間があれなんで、もう3時になりましたので、この7項目については、今日は決め

るということはないので、今後またいろいろな部分でお話しをさせていただく機会を取りたいと考えておりますので、この部分についてはよろしいですか。

委員一同)
異議なし。

金町長)
それでは一回、10分ほど休憩します

午後3時00分休憩

午後3時10分再開

(2) 平成29年度教育費予算について

金町長)
それでは再開をしたいと思います。

次に協議・調整事項(2)平成29年度教育費予算について、事務局の方から説明願います。

小林教育次長)
2ページをお願いします。

平成29年度の教育予算の編成に当たりましては、金町長の教育、子育て支援策としての昆布小学校放課後子ども教室の週5日開設、平成29年度教育行政執行方針における3つの重点施策としている「学校教育、社会教育を問わず、全ての児童生徒が、誰に対しても元気にはっきりと挨拶ができるような環境づくり」、「英語力の向上を図るため、子どもたちに英語への興味関心を持たせ、英語でのコミュニケーション能力を育成する活動」、それから「健康な体と体力の向上を推進するための活動として、子どもから高齢者まで、個人の体力に合わせた町民歩こう会の実施」、この3つについてを盛り込んだ予算要望とさせていただいたところであります。

これから町長査定ということになりますが、既に、副町長調整は終わっておりまして、副町長調整後の段階での主なものとして、お話しをさせていただきます。

教育委員会総務費では、まずALTの継続雇用、小学5年生から中学校3年生までを対象としました1日英語漬けの体験活動をするイングリッシュキャンプの開催、蘭越高等学校の教育振興対策として、黒松内町までの登校便のスクールバス運行、それから蘭越小学校開校120周年事業の実施ということであります。

小学校費では、蘭越小学校の給食用エレベータの更新、中学校費では、普通教室の拡幅、これは2年生と3年生、要するに2階と3階の教室を拡幅して可動壁を設置したいということで、1年生教室、1階部分については構造上、できればいじらない方がよいということもありまして、構造計算上は大丈夫だというんですけども、できれば1階の力がかかるところはいじらない方がいいかなということもありまして、1年生については、1年間だけ我慢をお願いするということにして、調整を行っているところです。もう一つは今日お話しがありまして、もし工期的に可能であれば、2月の議会に補正予算をお願いして、春休みにこの工事をして、新学期からは広くした教室で2年生、3年生をできればということも提示されたんですけども、問題は契約して工期が3月末までに終わるかどうか、今その調整を行っているところで、できなければ夏休みにお願いしたいということです。また、理科備品なんですけども顕微鏡の13台、これ60万かかりますけどもこれの整備、スクールバス車庫事務棟の新設、これが予算付けとされているところです。

社会教育費では、地域学校支援事業による放課後見守り活動等の継続実施、町民センター除雪機のリースでの整備、また、生涯学習情報誌「こぶしにまなぶ」は廃止して、町広報に生涯学習欄を設け、合体したものとすることということで取り進められています。

花一会図書館では、映像室を改修した閉架書庫の整備、これは年次計画となりますけども今年からということになります。それから放課後子ども教室では、週5日開設を取り進めるということになりました。

体育費では、新たに、歩こう会の開催、それからサッカー場ができたということで町長杯小学生サッカー大会の開催、来年度から通年となるサッカー場芝生管理委託、それから大きなものして総合体育館大規模改修工事を実施いたします。また、学校給食センター費では、吸水式冷暖房装置の取替え更新、また最後、教育費ではないんですけども、福祉費での予算付けとなりますが、小中学校の学校給食費の補助金の新設、これが主なものとして予算付けになったところでもあります。以上、簡単ですが説明とさせていただきます。

金町長)

はい。ただいま平成29年度教育費予算ということで、説明をいただきました。平成29年度予算については、来週から私の査定も入ってまいります。当初、平成29年度予算を集計した時点で8億円が不足しておりました。その8億円を穴埋めをするというか、各課から聞き取りをして、今副町長の査定が終わったところでございます。私の一つの考え方っていうのは、これまで貯金、貯金で、いくら貯めてるんですかとか、なぜそれができたかという、28年度は100っていう予算がありました。足りない分も含めて補正して120にします。最後は執行残といって120を全部使うということにはならないんです。余るんです。100になるかもしれない。その20は翌年度繰越金

として計上されるんです。そこは余剰金、余っている金額を使って29年度の予算にまた反映させる。できれば私は29年度の予算の中では8億が足りないから、今いろんな部分を削ったりなんかしてますが、基金を一時的におろして、崩して、少し事業をやるような形をして、29年度にその繰越金とか、交付税が確定したら、例年はその分が予算の中では増えるんです。29年度100をやったら、繰越金は20入れて100にしないから、20はある程度持った形の中で予算をやるんで、それと交付税が、いろんな歳入が入ってきて、もしかしたら130になるかもしれない。そうしたら100の予算のうち30は、この分だけ使わないから基金として積みますかということがありますが、そこを先食いして、当初予算で基金を崩して、30をもう1回戻す。そういうような当初予算を重要視した予算措置ができないかということで、今やろうとはしております。

教育予算についてもかなり教育長、次長も含めて、副町長査定の中には臨んでいただいて、万度には全部付けていけない部分もあったとは思いますが、教育予算については重点的に、特に総合体育館の大規模改修事業というのは本当に莫大な費用がかかりますが、これについてもきちっとやらなければいけないということも含めて、予算措置をしたと副町長からは聞いております。

それを含めて、せつかくの機会ですからこれを見ながら、もう少しこの辺のところはやってほしいとか御意見があったら出していただいて、来週から私の査定が始まりますので、参考にさせていただく意味も含めて、御意見をお願いしたいと思います。

首藤教育長)

新しく町長になって公約を出していますので、どうしても一時的に歳出は増えるらしいんです。とはいっても教育予算については、さらに大きな金額をどんどんどんどん要求したんですけども、かなりの部分で対応していただいているというのは正直なところで、金額が大きいものが今回多かったものですから。

金町長)

先程、次長の方からもお話しして、私も昼に聞いたんですが、中学校の教室。それも副町長からはせつかく新年度に入っていい環境でやらしてやった方がいいんじゃないですかということで、可能であったら2月に補正、2月に議会があるんです。そのときに議会の方をお願いして先に工事を進め、できるんだったら春休み中に工事をして、そして新学期を迎える。それを副町長が財政、今年は雪の部分ももっともといかない部分もあるか、これは分かりません。ただ、今の状況ではそれくらいは補正でできるんじゃないですかということも言っていたので、十分次長の方にもそれが可能であれば早くやってあげた方が喜ぶだろうということです。

鍋田委員長)

次長、可能ですか。春休みっていったら3月で5、6日、4月に入って4日か5日、トータル合せても12、13日しかないんだけど。

小林教育次長)

基本的に3月31日まで仕上げないとならないので、補正ですので。2階と3階ですので、3階は今閉鎖して使っていないので、契約すると直ぐに工事に入れます。2階の部分は今3年生しかいないので、3月15日卒業式が終わったら後はいないので、15日取れます。

鍋田委員長)

3階の場合はどこを破るんですか。今ある3年生の教室側の方の壁を破る。壁は2か所あるよね、1か所のフロアには。

小林教育次長)

鉄骨の入っている壁と入っていない壁がありますので、鉄骨の入っていない方の壁を破ります。ですから端の教室と端から2つ目の教室を一緒にします。

鍋田委員長)

そこがちょうど鉄筋が入っていないんですか。

首藤教育長)

入っているところと入っていないところ。入っているところは無理なんですけど。

本当は1年、2年、3年、三つやれば3学年とも広がるんだけど、やっぱり下の方は負担がかかるので、大丈夫だろうけどもということ。要するに二つやっただけだと、3年生が卒業すると、1年生には我慢してもらって、2、3年生になると、その次の学年は34人って少なくなりますので、次に入る1年生に我慢してもらえれば、何とかなるのではないかな。それとずばっと抜くのではなくて可動式ということで、ずばっと抜くともものすごく広がって倍になる。それはそれでちょっと使いづらいと思って、人数に合わせて移動できるように可動式、ちょっと高いんだけど、抜くだけよりは倍近くなるんですけど。

金町長)

子どもたちのためにやりたいということです。

首藤教育長)

学校祭のときに壁新聞を見たら、1年生39人いるんだけど学校に対する要望・不満みたいなのがあって、だんとつ1位が教室が狭いで25人いたんです。その次が8人とか、2つ目以降の要望は少ないんだけど、教室が狭いというのがだんとつなんです。3分の2くらいやっぱりいて、学校からの要望もあったんだけど、ちょっと可哀相だなという気がしていました。

金町長)

それと今回、私共、実はパブリックメンテで働いている環境なんですけど、それが車

庫事務棟の新設とあるところなんです。今働いている環境の中でも、トイレなんかは未だに昔ながらのトイレだし、休憩室のスペースとかも非常にない中で、子どもたちを安全に運転したり、そういうことから言ったら、職場環境の整備というか、ある程度のことも必要ではないかなってということも含めて。向かって左の横の方に新設したものを建てます。

首藤教育長)

今回は町長は、かなりの部分で教育委員会の予算要望に対しては、対応してくれていると考えております。

鍋田委員長)

なかなか大変だろうから、とりあえずでかいプレハブを2つ用意するから、2階式の割と洒落たプレハブ、あれで我慢してくれとかいうのかなと私思っていましたけども、新しく建つとはね。これは仕事のし甲斐もあるでしょう。

首藤教育長)

要望が多いにも関わらず給食センターの給水式冷暖房装置が、1千万超えるのが調子悪くなったりしています。

金町長)

直さないとならないものは、直さなきゃだめなんですよ。

鍋田委員長)

これ耐用年数って10年なのかい。この給水式冷暖房装置は。

首藤教育長)

18年経ったんですけど、耐用年数は15年。他のところも大体17、18年でまいつている。早いところは12年とかもあったみたいですが、やっぱり17、18年でまいつているみたいです。それでも経過確認はしてもらっております。

金町長)

私、最初は壁式の冷房ってあるから、壁のやつで何かできないのって言ったら、全部繋がっていて、それは空調とかに全部繋がっていて、全体一式になっているかららしいです。

首藤教育長)

そこは交換なんですけど、それを覆っているのが密閉式で、その中で空気が漏れている。どういうふうになっているか、それをちょっと空けるのが、焼いて外さないと、取れないんです。この中のどこが漏れるか分からないから、そうなるら全部焼いて外して探したら、買うだけかかるっていうんですね。

金町長)

何かこの他にこれだけはっていうことがありましたら。

及川委員)

新町長の肝いりで英語力に力を入れるということで、イングリッシュキャンプというのがありますよね。小学5年生から中学生が対象なんですけども、今年度は初年度ということで5年生から中学生が対象者で構わないと思うんですけど、年少の小さいお子さんたちは花一会で英語d eお話しが、1年生から4年生って割と空白期間がありますよね。そこら辺の保護者のお母さんたちから、そこを埋めてくれないとそこが空いて、いきなり5年生から英語を喋ってくださいということにはならないでしょうということで、そこを力を入れてほしいんですって、何人かの方々からお話しを伺ったので、30年、次の年からは小さいお子さんから、何か英語を楽しめるようなキャンプを計画しますよということをこのときに一緒にアナウンスしてあげると、安心するのではないかと思ったんですよね。やるっていうことにならなくても、考えていますよっていうことをお伝えしてあげてくださいっていうことと、英語でのコミュニケーション能力をみんなが高めましょうということをたくさんの方々に知っていただくためにもいいかなというふうに思います。

首藤教育長)

仰るとおりなんです。英語の必要性っていうのは前々から言われてますから、やはり何とかして取組まなければならないということで考えておまして、とりあえず何ができるだろうということで、まず手始めに何ができるだろうということで、外国人との直接の会話とか、そういうことも含めた中で、29年度にやってみようということで考えたんですが、いろいろ事務局の中でも、内部で打合せをした中で、日帰りのイングリッシュキャンプをやってみたらどうかということで、だけどどこからにするっていうことなんですけど、5年生から中学生くらいがいいだろう。今、5年生から英語をやっていますから。ところが学習指導要領が小学生が平成32年度から変わるんですが、英語だけは前倒して平成30年度から小学校3年生から前倒して始まるんですよね。5・6年生は教科化されますので、そういうこともあるので、必要性は十分、さらに広がるだろうと、とりあえず29年度、今年度からやるんですけど、今から30年度にこうやるっていうところまではいっていないんですけど、やはり手始めにこれをやってみて、もっと組織化をした中でもっと広くやりたいというふうには考えてますので、今みたいな意見を十分参考にして、また考えていきたいと思います。

金町長)

今、及川委員言ったように、私の公約は保育所・幼稚園のときから英語に慣れ親しむために外国語指導助手をもう1人雇って、そして週に何回か保育所と幼稚園に行って、ちょっとした会話とか、今言ったように教育委員会と金町政で描くような形で、そういうようなところに入っていけるくらいになればいいなというその願いはあるんです。だから今、29年度はこういうようなことでやって、費用がかかる部分ですから、ALT

で1人560万。ただ、子どもたちにこれからの時代に必要な部分があるんでね。だから違う部分をスクラップ・アンド・ビルドで、ある程度出来上がった分をそれはもう削るかもしれないけれど、必要な分は付けながら、それは変えてやっていく。これは30年度に向けて、29年度は一遍にちょっとできなかったけど、その辺のところはやればいいなというふうには思っています。

及川委員)

組織づくりに関しては、保護者の方でお母さんが外国、英語圏の方っていう方が何人かできていますので、先程のコミュニティスクールじゃないんですけど、自前のもので対応するっていうのもいいと思います。ボランティアで。

鍋田委員長)

ヒラフなんかにいる方々、夏暇なものですから、ちょっと声掛けすれば臨時講師で来てくれますし。

金町長)

通じ合える英会話、そういう部分が小さいうちから慣れ親しむことが、やっぱりいいと思います。だから町の中でそういう人たちがいて、ただでというふうにはいかないけれど、町の方で少しでも手立てをした部分の中で、普通よりは格安に地域の中でこういうことがきっとできるからっていうふうになれば、それが一番理想なんですよね。

及川委員)

そして授業とかいう形じゃなくても、普通の給食の時間に一緒に入ってもらって、ただ給食を一緒に話しながら食べるとか、自然な生活の中に入ってくるような形で構わないんじゃないかなと考えているので、いろんなあるものを使って、なるだけコミュニケーションの時間を作ってあげるっていうふうを考えていければ、いけるかなと思います。

金町長)

非常にいいお話しですよ。

首藤教育長)

どうしても言える人もいるんだろうけど、私たちの年代って英語で習ったけど要は使えないというのが多いみたいで、やっぱり英語をなるだけ参加させるとか、やってもらうというのが目的じゃなくて、学校を卒業した後に、学校に行っている間でもいいんですけど、日常会話ができたり、要するに使える、喋れるようになるというふうに、なんとかならないかなと思っていますので、そのために何をやればいいのかというのは模索中なんですけれど、真剣に考えていかなければならないと思っています。

鍋田委員長)

いいですね。

池田委員)

委員長もいらっしゃるんですけど、学童とか、昆布の放課後子ども教室の中で、例えば月一遍とかでもライアン先生と遊ぼうみたいな、そういうことは可能なんですか。

鍋田委員長)

ぜんぜんできます。大変な人気じゃないんですか。

金町長)

いいと思いますよ。それが可能か。池田委員、先程及川委員が言った地域とか、蘭越の中でこういう方がいて、お手伝いできるとか、そういうのを花一会とかの活動の中でできるとか。

鍋田委員長)

そういう人材を人材バンクというか、ストックしておけばね。

もう我々が教えちゃうからダメなんです。教えたらダメなんです。触れてればちゃんと子どもっていうのは関心持ってくれるんですよ。それをどうしても、自分も英語やってきたことがあるんだけど、どうしても教えちゃう。教えたらダメよね、英語が嫌いになっちゃうから。

金町長)

この間、ライアンさんが教育長と来て、町長室に来ましたけど、ダメだもんね。話せないというか、自分たちが。だからやっぱり来たときも、子どものうちからそういうふうになれば、堂々としながら、普段の会話とか、そういうものができる。こうやって成長してくる。これは絶対に必要だなと思います。

西澤委員長職務代理者)

例えばことば、単語分かっているけど、本場の英語で言われると、あまり聞かないから聞き取れない、何と言っているか。本当は自分がそのことばを分かっているんだけど、何と言ったか聞き取れないから、分からないっていうのが一つ。本当に聞くっていうのが大事だと思います。我々なんかは全部動詞だとか、何年やっても喋れない。

及川委員)

イングリッシュキャンプについては、5年生からというふうにお知らせいってしまうと思うので、先程お願いしたとおり小さいうちのコミュニケーションについても考えていますっていう。

首藤教育長)

将来的にはそういうふうにしたいと思います。なぜ5年生からっていったら、今、小学校が5年生からなものですから、英語を習っていない3年生、4年生を連れて行って、どうしたらいいかというのもまだこっちも考えてないので、とりあえずやってみて、や

っぱり広げていきたいなとは思っています。

鍋田委員長)

絶対これ必要だよね。及川委員が言うように発展的にすそ野を広げていく必要は絶対あります。

及川委員)

気持ちはあるので、ぜひ伝えていただければ。

首藤教育長)

そうですね。これだけで終わらせたいとは思っていませんので、もっともっと広げていきたいとは思っています。そのためには、皆さんの御意見もこういうふうにしたら1、2年生も入れるんじゃないかとか、3、4年生も入れるんじゃないかという意見とかがあれば、これから詰めていきたいと思います。

鍋田委員長)

少しずつ教育委員会の中でやりましょう。

金町長)

どうですか。予算に関して何かございませんか。

鍋田委員長)

給食費の補助どれくらいなんですか、予定としては。補助をするってことは決まったんですね。

金町長)

私としてはやりたい。教育費を削って、子どもたちの給食費を補助するっていう部分にはしたくないと思ったので、子育て支援施策の一環として、教育費と切り離れた考え方で行いたいなとは思っています。

鍋田委員長)

これによって、義務教育の給食費だけで終わるのか、例えば保育所の食事代だとか、そういうのは。

金町長)

あのやはりですね、保育所の保育料っていうのは、その所得によって、給食費も含めた部分の中での保育料っていうのは算定されているはずなので、だから一概に給食費だけを補助するっていうのは、保育所は難しい部分があると思います。それもあと高校までどうするかっていう部分もありますが、私は当面、義務教育の中で行って、いろいろ反響とか、そういう部分も聞いていきたいと思っています。

鍋田委員長)

でも、1回そういうのやっちゃったら、なんでだつてなるんですけど、来年からまた据え戻りますよっていうわけにはいかないですから。

金町長)

それはやるからには、その部分で継続してやらなければならない。そのできる範囲のある程度の予算措置で、その部分を措置しなければならないので、当初は1年延ばすかなとも思ったんですけど、いろんな事業があつて、もう1回見直しかけて、これやめると、やめたからにはこっちやるって、そういう部分も思ったんですが、私になった部分で無理を言って心も動いたんですが、お願いをしたいんだということを実は頼んで、お願いしてやってもらったんです。

予算の方については、よろしいですか。

委員一同)

異議なし。

金町長)

この件については、また私の町長査定をやつて、教育委員会からいろいろお話しを聞いた部分の中で、最終的に決定をさせていただいて、そして議会の方にまたお諮りしたいと思いますので、よろしくお願ひしたいと思います。

(3) その他

金町長)

(3) のその他ですけど、何かございますか。折角の機会ですから、その他ということで、全体通して皆さんから何かありませんか。よろしいですか。

委員一同)

異議なし。

金町長)

それではないという形であれば、今日の次第はすべて終了しましたので、会議を閉じさせていただきますけど、よろしいですか。

委員一同)

異議なし。

5 閉 会

金町長)

非常に長時間にわたりましたが、総合教育会議、私町長に就任して初めて、当初

はどのように進めていったらいいのかということで、非常に考えました。

事務局の方でもこういう形でっていうアドバイスをいただきながら、今日初めて会議を進めさせていただきましたが、本当にやはり教育っていう部分は、今日お話しして、ますます必要な部分だなというのを私も実感しましたし、蘭越町の子どもたちを育てるという、それは私たちの使命で、きちんとした対応をこれからも取っていかねばならない。そのためには委員の皆さんと私共と綿密にいろんな部分の話し合いをしながら、進めていくことが大切なんだと、非常に感じた次第でございます。

私も何とか町長に就任させていただきましたので、皆さんの期待に応えられるようにこれからも頑張っていきたいと思いますが、今後ともいろいろな分で御指導と御協力をお願い申し上げまして、最後に御挨拶として、今日の会を閉じたいと思います。

本日は、会議の出席ありがとうございました。

午後3時45分閉会